

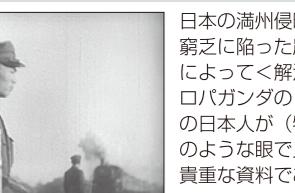
シリーズ1 帝国の現実と社会—「文化映画」の時代

DISC.1 中国大陆の戦火

開拓突撃隊 鉄道自警隊民謡記録

1937年

33分



日本の満州侵略には、世界恐慌の影響で深刻な窮屈に陥った農村が抱える過剰人口を移民によって解消するという目的もあった。プロパガンダの目的で製作された映画だが、当時の日本人が(特に農民が)植民地「満州」をどのような眼で見ようかと促されていたかを知る、貴重な資料である。

支那事変後方記録・上海

1938年

77分



1937年の第2次上海事変の直後に、三木茂が中国で取材したフィルムを龜井文夫が編集。戦場の即物的描写(三木)と巧みな編集(龜井)によって、単なる戦場の記録を超え、戦争の空しさをじみせ、反戦の意図を秘めた傑作となつた。

DISC.2 暮らし総力戦へ

雪国

1939年

38分



山形県新庄を中心、足かけ3年のロケ。豪雪地方の農民が雪との闘いに明け暮れる生活を徹底して描くことを目指した。農村の生活改善運動なども記録した秀作。英國ドキュメンタリー運動の影響を受けたソーシャル・ドキュメントの嚆矢でもある。

機関車C57

1941年

44分



最新鋭機関車C57の車両点検から出発までの構成のなかに、機関動力(所謂金吠)の猛烈な訓練車と審査する機関車のダイナミズムを描く。しかし、この作品を優れたドキュメンタリーと観るか、『国民生活総動員』映画のはりりと観るか、その評価は微妙に分かれらるだろ。

或る保母の記録

1942年

35分



英國ドキュメンタリー運動を紹介した厚木たかが、働く母と子どもたちの生活を、東京大井の労働者街にあつた私立保育所を舞台に見つけたソーシャル・ドキュメント。厚木は戦時教育的内容を加えるよう当局から圧力を受けながらも、勇気をもってそれを拒んだ。

わたし達はこんなに働いている

1945年

18分



敗色の濃厚になった時に海軍衣料廠の女子工員たちを取材。「私たちがこんなに働いているのに、なぜイギリスでは日本軍が玉砕してしまうのだろう」と肩を寄せ合って泣いたといふ。少女たちの凄まじいまでの労働を描く。戦争末期の狂気とも言える意識の倒錯が、そのままカメラに捉えられている。

DISC.3 アジアのなかの日本文化

舞楽

1937年

11分

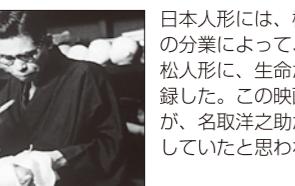


財団法人 国際文化振興会は、1934年、日本が満州事変へ國際連盟の脱退と国際的に孤立を深めながら、日本文化の海外広報を目的に設立された。次第に国策を強く反映するようになつたのが、少ながら、戦後に通用する優れた作品が製作されていたことは注目に値する。

人形製作

1937年

17分



日本人形には、機械生産ではない職人の手作りの分業によって、繊細な味わいがある。市松人形に、命が吹込まれる工程を丹念に記録した。この映画の製作について詳細は別だが、名取洋之助が監修する「日本工房」が関与していたと思われる。

娘々廟会(にゃんにゃんみやおほい)

1939年

20分



満州大石橋の娘々廟に詣でる農民の習俗、春の祭りの暖かいを描いた作品。アーノルド・ファンク(「新しき土」)1936年、日独合映画の監督)から直に譲り受けたといふ。芥川光蔵のズームレンズ使用は、当時、画期的な技術だった。しかし、芥川のまなざしは、満州農民の生活の内側にまで届いていたのだろうか?

室生寺 平安時代初期の美術

1940年

13分

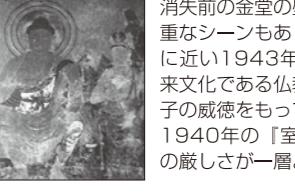


女人高野と呼ばれる室生寺の織なたすまい、仏像の美しさをモダンなカメラワークによって見事に捉えた秀作。その美の世界は、巻頭の「聖紀二千六百年…」というナレーションがなければ、しばし戦争を忘れさせるほど。

法隆寺

1943年

37分



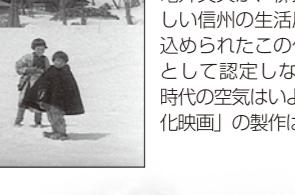
消失前の金堂の壁面が捉えられているなど、貴重なシーンもあり、かつ力作だが、戦争も未開に近い1943年当時には、皇國史觀の下、渡来文化である仏教文化を紹介するには、聖德太子の威徳をもって包みなければならないかった。

1940年の「室生寺」と対照させると、時代の厳しさが一層よく理解できる。

小林一茶・信濃風土記より

1941年

27分



龜井文夫が、俳人一茶の句を読み解きながら厳しい信州の生活風俗を描く。痛烈な社会批判が込められたこの作品を、文部省は「文化映画」として認定しなかつた。1941年になると、時代の空気はいよいよ切迫感を強め、単なる「文化映画」の製作は、いよいよ困難になって来る。

わたし達はこんなに働いている

1945年

18分



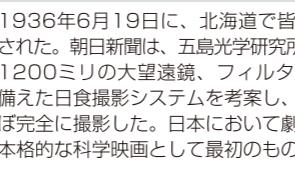
敗色の濃厚になった時に海軍衣料廠の女子工員たちを取材。「私たちがこんなに働いているのに、なぜイギリスでは日本軍が玉砕してしまうのだろう」と肩を寄せ合って泣いたといふ。少女たちの凄まじいまでの労働を描く。戦争末期の狂気とも言える意識の倒錯が、そのままカメラに捉えられている。

DISC.4 科学と技術

黒い太陽

1937年

11分

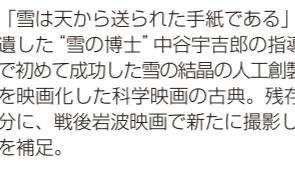


1936年6月19日に、北海道で皆既日食が観測された。朝日新聞は、五島光学研究所の協力を得、1200ミリの大望遠鏡、フィルターホルダーを備えた日食撮影システムを考案し、その全容をはば完全に撮影した。日本において劇場公開された本格的な科学映画として最初のものとなつた。

雪の結晶

1939年

(戦前版) + 1953年(戦後版) 20分

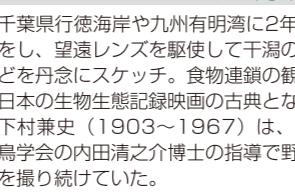


「雪は天から送られた手紙である」という言葉を遺した「雪の博士」中谷吉郎の指導により、世界で初めて成功した雪の結晶の人工創製(1936年)を映画化した科学映画の古典。残存する英語版6分に、戦後岩波映画で新たに撮影したバージョンを補足。

或日の干渦

1940年

17分

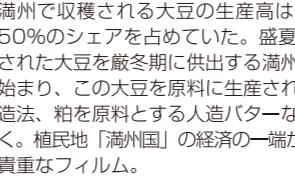


千葉県行徳海岸や川州に明治湾に2年かかりのロケをし、望遠レンズを駆使して干渦の研究者たちや船などを丹念に撮影。世界初の人工創製で、北九州の漁港で運営する漁船の船尾に、最初に撮影した雪の結晶が載った。女性の地位の向上も、戦前と戦後で大きく変わった。

ぬかものがたり

1949年

17分

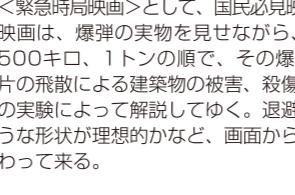


経済安定本部がスポンサーとなつた「ぬかものがたり」は、農家の米ぬかの再資源化とその有効活用法を説く。当時NHKラジオ「日曜娯楽版」で絶大な人気を博していた、三木鶴太とその「冗談音楽」グループが演出に加わり、一種の音楽映画に仕上げている。戦後初期の大衆文化を生き生きと捉えた貴重なフィルム。

満州大豆

1938年

22分



満州で収穫される大豆の生産高は、当時世界の50%のシェアを占めていた。盛夏に収穫、収穫された大豆を越冬期に供給する満州独特の風物に始まり、この大豆を原料に生産される植物油の製造法、粕を原料とする人造バターなどの生産を描く。しかし、芥川のまなざしは、満州農業の生産写真を撮り続いた。

爆風と弾片

1944年

45分



本作も「社会科教材映画大系」のひとつ。生産の近代化における一つの役割として、大量生産をさえる方法などを例にして、実験結果を示す。映画は、爆弾の実物を見せながら、250キロ、500キロ、1トンの順で、その爆風の威力、破片の飛散による建築物の被害、殺傷能力を実物大の実験によって解説してゆく。退避避難は、どのような形状が理想的かなど、画面からは切迫感が伝わる。

DISC.6 農村の現実・自立する女性たち

日本の稲作

1954年

50分



GHQと日本政府による、農地改革によって、大量的生産が創出された農村を舞台に、「日本の稲作」は、苗床づくりから刈入れ、田の冬備えまでを克明なカメラ・アイで描いてゆく。米づくりのプロセスが、これほどの慈しみをもって描かれたのは、この作品の以前にも、以後にもなかった。

*解説に※を施した作品は、VHS「文化・記録映画ベスト100」(刊行2001年)で販売中の作品と同一です。

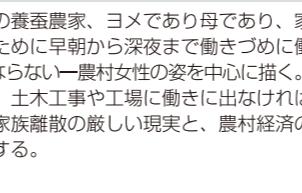
DISC.7 戻りの現実と社会—「教育映画」の時代

DISC.5 復興へ向かう生産と労働

炭鉱

1947年

33分

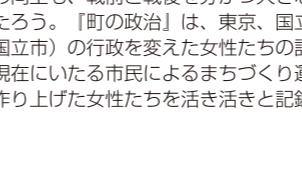


終戦直後、経済はなかなか復興の軌道に乗れなかつた。政府は、復興のための資金や資材を、石炭や鉄鋼などの重要産業に「傾斜的に投入する」政策をとつた(傾斜生産)。北海道美唄炭鉱に長期口座を行なつたこの作品は、當時、炭鉱国家管理法審議中の衆議院で議員全員が観覧したといつ。

海に生きる

1949年

33分

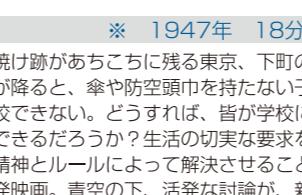


北九州の漁港を基地に活動する遠洋底曳舟船の乗組員の生活を躍動的にドキュメントした力作。雪は天から送られた手紙である「雪の博士」中谷吉郎の手記により、世界で初めて成し遂げた雪の結晶の人工創製(1936年)を映画化した科学映画の古典。残存する英語版6分に、戦後岩波映画で新たに撮影したバージョンを補足。

町の政治 へんきょうするお母さん

1957年

30分



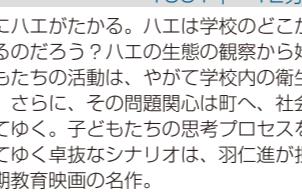
女性の地位の向上も、戦前と戦後で大きく変わった。この映画は、東京、国立町(現在の国立市)の行政を変えた女性たちの記録である。女性は、土木工事や工場に働きに出なければならぬ。家族離散の厳しい現実と、農村経済の問題を追求する。

DISC.6 農村の現実・自立する女性たち

九十九里浜の子供たち

1956年

32分



漁村の中学校における長期欠席生徒への対策をテーマとした。教師たちは、親を説得し、チームを組んで教室で子守りを引き受けながら、懸命に生徒たちを学校へ来させようとする。高度経済成長が始まる一方で、農山漁村でも一歩、文化の読み書きを教えない方針のもと、「アリサ」と名づけられた女の子は、発育に応じて、溢れるような意欲と体力、瑞々しい感性と創造力、仲間を思いやる優しい心を獲得していく。

DISC.7 子どもたち